

共軌回転弾

——金博士シリーズ・11——

海野十三

青空文庫

チャーチルが、その特使の出発に際して念を押し去った。

「ええかね。なるだけ凄いやつを買取るんじや。世界一のやつでなけりやいかんぞ」

そしてそっぽを向いて（これからは、何でも世界一主義で行つて一釜起すんだ）と呟いた。

ルーズベルトが、その特使の出発に際して竹法螺声で命をふくめた。

「あの手におえないダブル・ヴィの三号に、博士を付けて買ってしまえ。第一手段に失敗したら第二手段、第二手段に失敗したら第三手段……。第十手段まで行くうちには、必ず成功するように検算はしてあるからねえ」

二人のいうことも、この節では前とは大分違つて来た。

そこで特使と特使が、中国大陆の○○でぱったり行き逢つたわけだが、初めのうちはどっちもそれと気がつかない。それというのがチャーチルの特使は、不潔なモルフィネ中毒患者を装つて、よろよろ歩いていたし、一方ルーズベルトの特使の方は、男使と女使の二人組で街頭一品料理は如何でございと屋台を引張つて触れて歩いていたのである。

チャーチルの特使チーア卿きようは機甲中佐きこうちゆうさであつた。ルーズベルトの女特使おんなとくしルス嬢は、この間まで南太平洋の輸送機隊長をしていた航空大佐であり、その相棒たる男特使おとことくしベラントはリード商会の若番頭の一人で、ちやきちやきの手腕を謳うたわれている人物だつた。

「よう。料理は何が出来るのかね」

チーア卿は、ろれつの廻らない舌で、ベラントとルス嬢の屋台に呼びかけた。

「お好みの料理を作りますぜ。殊に燻製料理くんせいにかけては、世界一でさあ」

ベラントはぬかりなく宣伝にかかる。

「世界一かね。じゃあ、それを作って貰おうか。早いところ頼むぜ。それからウイスキーにミルクだ。コーヒーはジャワのを。シエリー酒も出してくれ。いや心配するな、金はもっているぜ」

チーア卿は、ポケットから、何枚かの法幣ほうへいをつかみだして、皺しわをのばす。

「へいへい。有難ありがとうございます。おっしゃったものは皆そろって居ります」

「へえ、皆そろって居るって、本当かね」

「嘘じゃありません。まあ、ごゆっくり召上って頂きませう」
うすきたない屋台から、途方もない絶品ぜっぴん佳肴かこうがとりだされたのには、チーア卿も目をぱちくりであった。

「燻製も、一番うまいのはカンガル―の燻製ですな。第二番が壁ぺきしゅうねずみ

州の鼠の子の燻製。三番目が、大きな声ではいえませんが、プリンス・オヴ・ウエールス号から流れ出した英国士官の〇〇の燻製……皆ここに並べてございませう」

「ええつ、何という……」

チーア卿は顔をしかめた。

「旦那。おどろくのは後にして、一番から順番に召上つてごらんになすつたら。おいしくなかつたら、燻製屋の看板は叩き割られても文句を申しませんわよ」

と、ルス嬢も口を出す。

「いや、わしは……おれは、一番と二番とで沢山だ。ううい、い

い酒だ」

チーア卿は酒に酔ったふりをして、その場のおどろきを胡魔化ごまかす。

「勘定かんじょうをしてくれ。いくらだい」

チーア卿は、几帳面きちょうめんに精算をし、小銭こぜにの釣銭までちやんと取つて、街を向うへふらふらと歩いていった。

「うまく行つたわね。これである人は、うちの名代燻製料理を吹ふいちよう

聴きしてくれるわね」

と、ルス嬢は涼しい顔。

「とんでもない。彼奴あいつは油断ゆだんのならない喰わせ者だよ」

「へえ、喰わせ者」

「そうよ。器用な早業はやわざで、カンガルーの股燻製ももくんせいを一挺ちよう、上衣うわぎの下へ隠しやがった。あいつは掏摸すりか、さもなければ手品師てしなしだ」

「まあ、そんな早業はやわざをやったのかね、あの半病人のふらふら先生せいが……」

「まあいい。それよりは商売だ。金博士きんはかせの耳みみに一刻いつこくも早く届くように、世界一の燻製料理の宣伝にかかることだ。さあいらつしやい。世界一屋の燻製料理。種類の多いこと世界一。味のよいこと世界一。しかも値段のやすいこと世界一。さあいらつしやい。早くいらつしやつてお験たましなさい」

気の軽い碧眼へきがん夫婦の呼び声に、この陋巷ろうこうのあちこちから腹の減った連中が駆けよって来た。屋台の前は、たちまち栄養不良

患者の展覧会のようになった。

燻製料理世界一屋の商売は だいはんじょう 大繁昌だ。

しかしベラントの顔にもルス嬢の顔にも、一抹の不満の色が低
迷している。

「だめじゃないか」

「どうしたんでしょね、あの人は……」

あの人は……。あの人とは二人の期待している人物が現れない
ことである。あの人は世界一の燻製好きだ。そして世界一の科学
兵器発明家だ。その名前を金博士という。その人こそ二人が、い
やチーア卿も亦、またはるばるこの地へやって来て、何とか取りすが纏ろ
うという目的の大人物だった。金博士は、この陋巷のどこかに住

んでいる筈だった。

2

「ふむ、ふむ、ふむ」

生返事をするばかりで、すこしもはっきりしたことを言わない金博士だった。それも道理、今、博士は燻製のカンガルーを喰べることになった。夢中になっている。

「……そういうわけでしょう。お礼の点については、はばか憚りなが

ら世界一の巨額をお払いしますじや。チャーチルも申しとりましたが都合によつては、カンガルーの産地オーストラリア全土を博士に捧^{ささ}げててもよいと申して居りますぞ。どうぞその代り、博士が今お手持ちの発明兵器で、世界一なるものを余にお譲りねがいたい。そこに大英帝国の最後の機会がぶら下^{さが}つて居るといふわけしてな、どうぞ御同情を賜^{たま}りたい。いかがですな、目下お手持の発明兵器で世界一と思^{おぼ}召^{しめ}すものは……」

「ふむ、ふむ、ふむ」

博士は、猫が魚のあらと取組んでいるように只呻^{たげ}るばかりである。カンガルーの燻製^{ことごと}が、悉く博士の胃袋^{おさま}に収^{おさ}まるまでは、まず何にも言わなかつもりらしい。

こんなわけで、早いところ餌をもつて押掛けたチーア卿の早はやわ業は、街頭を血眼ちまなこになつて金博士の姿を探し求めているルーズベルトの男女特使を、今も尚なお失望させている。

「まだ現れんね」

「どうしたんでしようか。居ないわけではないんですけれどね」

地下二百尺の金博士の部屋では、今や博士は大きな逆しゃっくり吃くをたて始めた。

「ひつく。ひつく。ああ、うまかった。久しぶりじやったからのう。ひつく、ひつく。どりやすこし睡るとしよう」

遠慮を知らぬ金博士のことであるから、あわてるチーア卿を相手にせず、ごろりと横になると、早はやぐうぐうと大おおいびき軒げん。

「もしもし博士、喰い逃げとは、そりやひどい……」

と、卿は立上って博士をゆすぶり起そうとしたが、待てしばし。ここで無理に起して、臍へそまがりの博士に又えらく臍をまげられては特使の目的を達することは出来ない、苦しい我慢を張る。したがチーア卿とて只の鼠ではない。幸いあたりに睡る博士の外ほかに人はなし、秘密の研究室は自分の外ひとめに人眼というものがない。この機会に乗じて、金博士の最近の発明兵器を調べておいてやろうと、たちまちチーア卿は先祖から継承の海賊眼かいぞくまなこを炯々らんらんと輝かし、そこらをごそごそやりだしたことである。

おどろいたことに、部屋の扉はみんな鍵がかかっている。だからどの部屋へも入れた。金博士の実験室は、あまりにも雑然と

して、それが研究の主体だか分らない。すばらしい毒瓦斯ガス製造装置だと思つて、たかの知れたキップの水素瓦斯発生装置を持つて帰つて笑われても詰つまらないと思つたチーア卿は、実験室には手をつけないことにして、更に次の部屋へ。

次の部屋は模型室だつた。四方の壁に棚が吊つてあつて、その上に博士の発明になる新兵器の模型の数々が、まるで玩具屋の店頭よろしくの光景を呈して並んでいた。それを一つ一つ見ていく卿は、溜息しようのつきどおしだ。それというのがどれもこれも垂涎すいぜん三千丈しようの価値あるものばかり。三段式の上陸用舟艇あり、超ロケット爆弾あり、潜水飛行艇あり、地底戦車あり、珊瑚礁架橋さんごしようかきよう機きあり、都市防衛電気網もつあり、組立式戦車要塞ようさいあり、輸送潜

水艦列車ありというわけで、どれもこれも買つて行きたいものばかりで目うつりして決めかねる。さてこそ出るは溜息ばかりで、卿の心臓はごとごとと鳴つて刻々變調を來たす。

「困つたなあ。この中で一体どれが世界一であろうか」

それは分りかねる。分りかねるならば、択んで行く途なし。さらばやはりみんな買つて行こうとすると、これだけ嵩ばつたものを到底持ち出しかねる。

「困つた。どうすればいいのか」

卿は、顔一面にふき出た脂汗を拭うことも忘れて、いらいらと部屋中を歩きまわる。結局決つたのは、もつと別の部屋を探してみようということだった。

そのチーア卿が、五番目の部屋に侵入したときに、漸く満足すべき結果に達した。

「ああ、これだ、これだ」

卿の駈けよつたのは、部屋の壁全部を占領している大金庫であった。この中にこそ、金博士の重要書類がぎっしり入っているに違いない。

幸いにして金庫破りにかけてはチーア卿は非凡なる技倆を持っている。彼はこの方では英国に於ける第一人者といつて差支えないほどの研究者である。その大金庫は、僅々きんきん十一分のうちに見事にぎいつと開かれた。

ところが、この金庫の中に、卿をひどく当惑させるものが待つ

ていた。というのは、予想どおり設計書が一件ごと別々の袋に入
ったものが、三百何十種収められて居り、その袋の表面を見ると、
「世界一の発明。引力相殺装置」とか「世界一の発明、宇宙線
げんどうりよくを原動力とせる殲滅戦兵器」とかいった具合に、どれを見
ても、名称の上に「世界一」を附してあることだった。これでは
チャーチルの命令に応じて、最も勝れたる世界一の発明兵器とし
て、どれを択んで持ち帰りなばよろしきや、さつぱり分らない。
チーア卿たる者、宝の山に入りながら、あまりに夥しき宝に酔つ
て急性神経衰弱症に陥ったきらいがないでもない。

こうなると人間はいやでも単純に帰らざるを得ない。つまり、
何でもよいから、持てるだけ持って帰ろうということだ。チーア

卿は両手に抱えられるだけの設計書袋の束を二つ拵こしらえて、それをうんこらさと抱かかえあげると後をも見ずに金博士の部屋からおさらばを告げたのであった。盗み出した設計書の件数、しめて五十三件、さりとは慾のないことではある。

3

チャーチルの泥棒特使が仕事を終つて去つたが、ルーズベルトの特使二人の方は、いつまでもまごまごしていた。

が、彼らにもようやくチャンスは巡り来り今や彼等は駿馬の尻尾の一条を掴んだような状況にあつた。というのは、たまたま燻製屋台へ買いに来た金博士の若いお手伝いの鉛華をルス嬢が勘のいいところで発見、そこへベラントが特技を注ぎ込んで、たちまち鉛華をおのれたたちの葉籠中^{やくろううちゅう}のものとしてしまったからである。

「旦那さまぐらい燻製ものに理解がおりになり、そして燻製ものをお好みになる方は世界に只お一人でございますわよ」

と、鉛華も遂に本当のことをぶちまける。いよいよチャンスは来たぞと、燻製屋に化けこんで苦勞のかぎりを今日まで尽していたルスとベラントは、うれしさが腹の底からこみあげてくるのを

一生懸命に押し戻し、

「まあ、そういう頼母たのもしい御方さまに巡り会いますなんて、神様のお引合わせですわ」

「そうだとも。それに……ちよつとこつちへ来てください、美しい鉛華さん」

「あら、お口がお上手なのね。警戒しますわ」

「いやなに、ぎつくばらんの話ですが、貴女あなたが金博士にわれわれをとりもつて下されば、博士の貴女に対する信頼は五倍も十倍も増しますよ。俸ほうきゆう給給も上るでしょうし、うまいものも喰べられる。そればかりじゃない、われわれも儲けの一部を貴女に配当します。もちろんこれは断じて闇取引じゃない、正当なる利得です

し、それにねえ鉛華さん……」

と、ベラントは此所を先途と商才のありつたけをぶちまけて、遂に鉛華を完全に手に入れてしまったのである。

そうなる、一刻も早く本当の商売に突入しなければならぬ。ルスは各種の燻製料理をぎっしり詰めこんだ食品容器をさげベラントに目配せをする。そこで三人は打連れだつて金博士の住む地下室へと下りていった。

金博士は、睡眠から覚めて、部屋の中をよぼよぼと歩きまわつていた。

骸骨のように大きい頭、黒い眼鏡、特徴のある口髭、頬鬚、黒い中国服に包んだ痩せた体——一体この体のどこから

あのようなすばらしい着想とおそるべき精力とが出て来るのであろう。

「ふふふん、ふふふん、ふふふん」

金博士は、妙な咳せきばら払いをつづけさまにして、部屋の中を動きまわっている。失意か、得意か、さっぱり分らない。チーア卿が開け放しにしていた大金庫の前を幾度か行き過ぎるが、その方には見向きもしない。

そこへ鉛華が入って来た。

「先生、町に素敵な燻製料理を売ってましたので、買って参りました」

「燻製か。燻製はもうたくさんじゃ」

「あらつ、先生のお好きな燻製でございますよ」

鉛華は博士の答に、意外な面持。うしろではルスとベラントが心配そうな顔を見合わせる。

「燻製はもうたくさんじゃというのに。さつき、いやというほどカンガルーの燻製を喰ったよ。腹一杯になった」

「まあ、どうして召上ったのですか」

「泥棒がここへ持って来て、わしに喰えといった」

「泥棒が……」

「そうだよ。チャーア卿といってな、チャーチル奴めの特使じゃよ。

モヒ中毒を装った苦にが苦にがしい男じゃ」

「それが泥棒でございますか」

「大泥棒じゃ。あれを見よ。わしの大金庫から新兵器の設計書袋を二抱かかえも持って逃げよつた。怪しからん奴じゃ」

「まあ、それで先生は、その泥棒をお捕えにはなりませんでしたの」

驚きは鉛華よりも、後に控えたルーズベルトの特使ルス嬢とベラントの胸の中うちだった。折角せつかく来たが、チャーチルの特使に一足お先へやられてしまったとあつては、甚だ拙ますい。

「あの泥棒は逃がしてやった。それにわしはすっかり腹がくちくなつて、指一本動かすのも大儀たいぎじゃつたからなあ」

「まあ、いつもの先生なら、決してお逃がしになるのではありませんでしたのに……」

ルス嬢はこのときそつと鉛華の袖を引いた。それで鉛華はわれに帰って、金博士に燻製をすすめる役を引受けたことを思出したが、こうなつてはどうにもすすめようがない。その困り切つた顔を見て取つたベラント、すかさず前にとび出し、博士に倚り添つて聞き始める。

「金博士。私達は、燻製料理を持つて伺いましたが、実はルーズベルトの特使でございまして……」

と、臆せず底をぶちまけるアメリカ流に、博士は驚くかと思いの外、^{ほか}おくと、

「分つとるよ。ベラントにルス嬢じやろう。わしの発明兵器を、わしごと買い取りに来たのじやろう」

と、ずばり凶星すぼしをさした。ベラントの愕おどろき、

「ええつ……」

といったまま、あとが続かない。

こういうときに婦人は度胸どきょうのある者、ベラントがノック・アウトされたと見て、前にとびだして博士の腕を抑える。

「今呼び下すつたルス嬢でございます。仰おっしゃ有つたとおりのわ

けですから、ぜひ契約して頂きとうございます。その代り博士のお望みは何なりと……それに特別精製のアメリカ名産バイソンの燻製を一口召上つて下さいまし。これこそ世界最高の珍味でござ
います」

金博士をくどくには、いつの時代にあつても燻製料理によるの

が捷しやうけい徑けいだという鉄則を、ルス嬢もはずさない。はずさないばかりか、ルス嬢は躊ちゆうちよ躇ちよの色もなく、博士の前に燻製バイソンなどを詰めあわせた食料容器の蓋をぽかんと払ったものである。

4

やっぱり効目ききめがあつた。燻製料理は、金博士にとって、恰あたかもジグフリードの頸くびに貼りついた椎しいの葉の跡のようなものであつた。それが巨人に只一つの弱点だつた。博士は今や羊のように温和おとなし

くなつて、前にルス嬢とベラント氏を座らせている。尤も博士自身は、兩人提供のバイソンの燻製を大皿にうつして、盛んにぱくついている有様だった。

人見知りをしないで、核^{かくしん}心にとびこんでいく心臓人種のアメリカ人のことなれば、嬢も氏も、こうなつては燻製屋の仮面をさりとかなぐり捨て、ルーズベルトの特使でござると名乗りあげて、金博士の前に陣を構えているわけである。事は早くなければならない。「博士。飛切り上等の物凄い新兵器として何を提供して頂けましょうか」

「うむ。むにやむにや……」

「それを使えば、敵側は全く処置^{しよち}なしという凄^{すご}いものを御提供願

いたい。そのお礼の一つとして、博士をアラスカへ御案内したいですな。エスキモーの燻製など、天下の珍味でございますよ」

「わしは人間は喰わぬ」

と、人を喰った博士が、コップから水をごくりと飲んでいった。「今のはベラントの失しつげん言でございます。博士、世界をたちまちしょうふく懼おそ伏ふくさせる新兵器といたしましては、どんなものを御在庫ございこになつていまいしょうか」

「分つているよ。では案内しよう」

博士は、今日は珍らしく事ことの外御機嫌みな斜なめならず、両特使を引連れて、研究室へ導く。

「ここにあるのが、訪問者の身許透視器みもととうしきだ」

と、博士は壁に嵌めこんである複雑な弱電装置を指し「入口の扉に近づくと、この人体周波分析器が働いて、その人物のあらゆる特徴と思想を分解し、こっちの自記記録紙の上にプリントするのだ。ほら、これが例のチーア卿の分だ。あとの二つが君達両人の分だ」

と、自動ピアノの鑽孔布さんこうふのようなものを引張り出して示す。ルスとベラントは、どっと冷汗をかく。

次の部屋は模型室だ。そこへ一步を踏み入れた両特使は、棚にぎつちりと並んだ夥しい兵器模型にたちまち魂を奪われた。

「これは何でしょうか」

「これは何ですの」

「ああ、それは陳腐ちんぷなものばかりじゃ。今列国の兵器研究所が、秘密に取上げているものばかりだよ。今頃そんなものに手をつけては手遅ておくれじゃ。こつちへ来なさい」

博士は興味のない顔で次の室へやへ。

「この大金庫の中には、世界一を呼称こしやうする新兵器の設計書袋が五百五十種入って居る」

「ほう、五百五十種もですか」

「そうじゃ。さつき泥的チーア卿きやうが、この中の五十三種を攫さらっていつてしまったよ」

「ええ、チーア卿が……あの、五十三種も……。それはたいへんだ」

「なあに、愕くには当らんよ。もうあと三十分もすれば、チーア卿は後悔するだろう」

「と申しますと……」

「あの五十三種の書類はあと約三十分すれば、自然発火するんじゃない」

「自然発火？」

「そうじゃ。この書類は一定の温度と湿度と気圧のところにいる限り安全じゃ。つまりこの部屋はその適切なる恒久状態においてあるこうおんしつあつしつ恒温湿圧室なのじゃ。したが、一旦他へ搬ばれ温度と湿度と気圧が違つてくると、一定時間の後には用紙が変質して自然発火するのじゃ。チーア卿は、さっきの装置で調べると、今飛行

機にあれを積んでインド方面へ向けて飛行中だが、見ていなさい、あと三十分で飛行機は空中火災を起して墜落じや。泥棒にはいい懲しめじやよ」

「へえん、それはそれは……」

ベラントとルスとは、目を三角にして、互いに顔を見合わせた。

「わしは元来淡泊じや。君たちの要求をもう一度改めて聞いて、すぐそれに適かなつたものを売ってあげよう。希望をいってみなさい」

「はあ、それは有難うございます。博士、アメリカの欲しいものは、世界一の物凄い破壊新兵器で、これを防ぐに方法なしというものをご頂きますの」

「そうなんです。戦艦いえどと雖も飛行機には弱く飛行機と雖もロケー

ターには弱く、ロケーターと雖も逆ロケーター式ロケット爆弾には弱い、金博士と雖も燻製料理には……いや、これは失礼……というわけですが、ルーズベルトのお願いしたいと申す新兵器は絶対に弱味のない不死身の手のつけられないハリケーンの如き凄い奴を、どうぞ御提供願いまする」

「そうか。そういうことなら 共きょうやくかいてんだん 転回 転弾が条件にぴつたり合っている」

「えっ、共転回転弾。ああ、なんとというすばらしい名称でしょう。大統領はどんなにおよろこびになることでしょうか」

「ええと、あれは第五十四号だったな」

と、博士は大金庫の中から設計書類の一つを引張りだした。袋

の口から中を覗いていたが、するりと抜きだした折畳んだ大きな紙。それを机の上に拡げる。

「あら、白紙しらかみだわ」

ルスが愕おどろいた。

博士は無頓着むとんちやくに、その大きな紙の四隅をピンでとめた。それから机の下をさぐっていたが押し釦ボタンの一つをぷつんと押した。すると紙がぱつと螢光色けいこうしよくを呈して光りだした。空白くわくはくの紙上にはありありと図面が浮び上る。

「共軛回転弾というのは、こういう具合ぐあいに、二つの硬い球かたが、丁度鎖ようどくさりの環わのように互いに互いに九十度に結合して、猛烈な高速で回転するのだ。そして互いに相手を励磁れいじして回転を促進し、永久に停

まらない。この硬い球は、原子核の頗る大きいものだと思えばよろしい、わしが五年かかって特製したものだ。硬いこと重いことに於て正に世界一。そしてこれを共軛回転させてスピード・アツプすると、その速力は音波の速力の約三十倍となる。そこへ持つて来て、これは一名『鉄の呪い』という名があるくらいで、鉄材を追駆けて走りまわるのじゃ。じゃによつて、いかなる戦車群、いかなる大艦群だいかんぐん、いかなる武装軍も、たちまちこの回転弾のため粉砕されてしまうというわけだ。この共軛回転弾によつて破壊し得ないものは、この地上に一つもない。どうじゃ、聞いているのか」

「ええ、聞いていますとも、まあなんとというすばらしい新兵器で

しよう」

「ああ、一千億ドルの値打があるよ。現物はこつちにある。来てみなさい」

金博士は悠揚^{ゆうよう}迫^{せま}らず、更に奥の部屋に案内する。そこは倉庫のようなところだった。博士の立停^{とど}つて指すところに、一つの木箱^{ばこ}があつた。箱の大きさは二米^{メートル}立方。

「これじゃ。この中に入つとる」

「まあ、危くありませんの」

「いや、まだ起動^{きどう}して居らぬから危くない。この棒を抜くと、まず一部分に静かなる化学変化が起り始める。その化学変化がだんだん発達して、小さな歯車が動きだす。電気が起る。小さいモーター

ターが廻る。だんだんと大きな牽けん引いん力りよくが起り、電力が発生し、やがて二つの硬こう球きゆうが双方から寄つて来て、ぐるぐると回転をはじめめる。するとこの箱がめりめりと壊れる。中から回転弾が、ぼうんと飛び出す。あとはめりめりもりもりと破壊が始まる」

「すげえもんだなあ」

「目的地にこの箱がつく時刻が分つて居れば、この時じげん限かん管かんの適当なるものを壊しておいてから起動棒を抜くと、ちゃんと所定の時刻に回転を始める仕掛になつて居る。目的地へこの箱のつくのは何時間後じやな」

博士は二人の特使の方をふりかえつた。

「はい。目的地へつくのは、これから輸送機を呼んで、一時間後

には当地を出発できますから、あとワシントンまで六千九百九十
九キロを平均時速八百キロで飛んで、八時間と四十五分。飛行場
から直ちに白堊館はくあかんまで自動車はこで搬はこんで大統領に謁見するとして
その時間が十五分。合計丁度ちようど十時間。十時間です。博士」
「十時間、ああよろしい。正確に十時間後と調整して置こう」

5

ルーズベルトの両特使は、鬼の首をとった以上の悦よろこび方で、直

ちに電報をうって、「共軌回転弾を持ちて帰国する」旨を大統領むねに報しらせるやら、輸送機を呼びよせるやら、俄にわかに中国大陸土産みやげを搔かき集めるやらで、こま鼠ねずみのようにきりきり舞いをしていたが、それでも一時間後には、ちゃんと輸送機上の人となっていた。もちろん共軌回転弾の箱は、機上に大事に保管されていた。

大陸を出発。成層圏まで一気に上昇して、逆流について東へ飛行をつづけ、予定のとおりワシントンへ凱旋がいせんしたのであった。それから後の話は、むしろ金博士の部屋に於て描写するのがよいであろう。

金博士は、珍らしく新聞を読んでいる。その翌日の夕刊紙だった。

新聞の上段ぶつとおしの特初号活字とくしよごうかつじの白ぬきで伝える大事件の特報……

“ワシントン、一夜のうちに崩壊ほうかいす——白聖館最初に犠牲ぎせいとなる。危機一髪、ル大統領、身を以て遁のがれる。崩壊事件の真相全く不明”

“ワシントン崩壊事件の原因は、不可視怪戦車か。——崩壊は引き続き蔓延まんえんちゆう中——軍需工場地帯を南進中”

“被害遂つひにニューヨーク市に波及はきゆう。高層建築地帯は昨夜のうちに全壊”

“不可視戦車の音を聞くの記——特派決死記者アーノルド手記”
“不可視戦車鎮圧に出動の第五十八戦車兵団全滅す。空軍の爆撃

も無力。鎮圧の見込全然なし”

“怪犯人の容疑者たるルス嬢とベラント氏は昨夜私刑しけいさる”

鉛華女が、無線電話のかかって来たのを金博士に伝えたので、博士は新聞を机きじょう上へ放りだして、送話器に向った。

「はいはい。金博士じゃが。なに、あの件は何度訊きいても変った返事は出来ぬよ。ルーズベルト君。一体共軛回転弾の発明は未成でな、起動法は考え出したが、停止法はまだ考え出さんのじゃ。じゃから処置なしじゃ。……すぐ考え出せといつても、そうはいかん。今までに一年も考えたんだが、さっぱりよい停止方法がないのじゃ。当分暴あばれたいだけ回転弾に暴れさせて置く外ないね。……それは駄目だよ。君んところには自慢の学者のインシユタ

インがいるじゃないか。あの男に相談してみた方が早いよ。なに、彼も匙さじをなげて自殺したと。莫迦ばかな奴……とにかくわしに責任はないよ。君の特使が申出たとおりにやったばかりじゃ。そんなに文句をいうのなら、これから君がわしのところへやって来たらいじやないか。電話には、後あともう出ないよ。では失敬」

金博士は、送受話器のスイッチをぴちんと切ると、髭をふるわせて呵々かかたいしょう大笑わらした。そして独ひとりごと言ことをいった。

「莫迦な奴らだ。目的地についたとき共軛回轉彈が活動するようにと、時限装置を合わせるぞといってやったじゃないか。目的地といえ、戦場にきまつとる。あれをわざわざワシントンへ持つて行く莫迦もないもんだ。アメリカ人というやつはどうしてああ

そそっかしいのだろうか」

それからごくりと咽喉のどを鳴らし、

「それにしても、ルスとベラントという燻製料理の名人を二人も同時に喪うしなったことは、世界の大損失じゃ。そうそう、まだどこかにバイソンの燻製がまだ少し残っていたっけ」

金博士はにやりと笑って立上ると、冷蔵庫の中へ頭を突つっこ込んだ。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第10巻 宇宙戦隊」三一書房

1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1944（昭和19）年9月

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2009年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

共軌回転弾

—金博士シリーズ・11—

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 海野十三

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>